

市民まちづくり活動の初動期における支援制度の役割に関する研究

- 「世田谷まちづくりファンド」助成対象団体の実態調査を通して-

The Role of Supporting System in the Early Stage of Citizens' *Machidukuri* Activities
- A Case of the "Setagaya Machidukuri Fund" -

96120 荒俣 桂子

This study aims to clarify the actual condition of *machidukuri* groups, which was subsidized by the Setagaya Machidukuri Fund in their early stages. The section "*Hajime-no-Ippo*," which means the first step, is one of the four sections in the Setagaya Machidukuri Fund. It was established to make it easier for *machidukuri* groups to apply. They can get 50,000-yen-aids by just handing in an application and being examined, although applicants in other sections have to make presentations in public. Through interviews with them, we can indicate three points. First, the section actually works as a section which applicants can easily apply for. Second, the groups divided into two types: one is the groups which start *machidukuri* activities simultaneously with the subsidy. The other is the groups which get subsidy for further development of their *machidukuri* activities. Third, there are few differences between the *Hajime-no-Ippo* section and other sections in terms of the aim of activities, construction of members, and the way of doing activities.

1. 研究の背景と目的

近年、都市計画における市民参加が重視され、マスタープランやさまざまな計画でもワークショップ等の手法を用いて市民参加が行われようとしている。一方で、1998年に特定非営利活動促進法が施行され、まだ制度的に不十分な点があるものの、今後NPOという組織形態でまちづくり活動に携わる団体が増えることが期待されている。また、まちづくりNPO育成を目的とした助成制度を整備する自治体も最近急速に増えてきた。

世田谷区では、1975年に区長公選制となった頃から市民参加のまちづくりへの取り組みが始まり、1992年には住民による自主的なまちづくり活動を支援する公益信託「世田谷まちづくりファンド」(以下ファンド)が設定された。ファンドは、住民・行政・企業のいずれにも属さない中立的な立場から住民の自主的なまちづくり活動またはそれを援助する活動を行う団体に対して助成を行っている。1999年度までに7回の助成事業が行われ、82グループが助成を受けた。本研究では、ファンドの初心者向け部門「まちづくりはじめの1歩助成部門(以下はじめの1歩部門)」に着目し、初動期の市民まちづくり活動支援制度をうけた団体の活動実態を明らかにする。研究の方法としては、ファンドの助成を受ける際の申請書、報告書を参考にするとともに、はじめの1歩部門の助成を受けた団体のうち、次年度以降継続助成をうけた16グループを対象にヒアリング調査を行った。

2. 「世田谷まちづくりファンド」
設立の経緯2.1 市民主体のまちづくりへの
実験的取り組み

1975年に区長公選制が導入され、世田谷区は市民参加の実現に向け調査や条例の整備などを行った。そして、防災まちづくりの一環としてまちづくり協議会を立ち上げたが、行政主導型で

は限界があるという結論に至った。80年代に入り、行政ではない機関が住民の相談にのれるよう専門家派遣制度を創設し、これと地区まちづくり協議会方式を活用してまちづくりを進めていった。地区まちづくり協議会活動は総合的視点をもつまちづくり活動へと発展し、自主的なイベントやワークショップが実施された。

2.2 まちづくりセンター・ファンド構想とその
実現のための実践的調査

1987年、区の基本計画にまちづくりセンター構想が位置づけられた。88年には、まちづくりセンターの実験的施設「まちづくりハウス」が設けられ、実践活動を通じた調査が始まった。また、月に1度「まちづくりハウス運営会議」として話し合いが行われ、まちづくりセンター・ファンドの構想案の概要が決められた。さらに、人材発掘やまちづくり意識の啓発、また住民のまちづく

表1 ファンド設立までの世田谷区でのまちづくり¹⁾

	世田谷区関連	市民参加型まちづくり事業等	まちづくりセンター、ファンド関連
1975	・区長公選実施		
1977	・既成市街地再整備基本調査		
1978	・基本構想		
1979	・基本計画 ・三軒茶屋再開発組合設立		
1980	・(財)世田谷区都市整備公社設立	・北沢3、4丁目地区まちづくり協議会 ・太子堂2、3丁目地区まちづくり開始	
1982	・都市デザイン室発足 ・街づくり条例制定		
1983	・街づくり推進課発足		
1985	・都市整備方針策定		
1987	・新基本計画	・宮坂駅界隈づくりコンペ ・公共トイレアイデアコンペ	・まちづくりセンター設立調査開始
1988	・三軒茶屋地区再開発都市計画決定	・まちづくりリレーイベント開始 ・きつねまつり開始 ・滑川工場壁突色彩デザインコンペ ・バス停のある小広場設計、アイデア公募 ・界隈塾	・まちづくりハウス運営会議開始
1990		・粕谷地蔵前小広場バス停整備	
1991			・まちづくりセンター構想案策定
1992		・エコロジカルまちづくり塾	・まちづくりセンター発足 ・まちづくり活動企画コンペ ・「世田谷まちづくりファンド」の設定

り活動の需要調査を目的として「まちづくりコンクール」も行われた。ここでの公開審査会等の運営方法は後のファンドで生かされていった。1992年には、ファンドの実験版として「まちづくり活動企画コンペ」が実施された。この時、助成対象となるまちづくりの範囲の明確化、部門設定を分かりやすくすること、まちづくりセンターの審査・助成決定に無関与であることの周知が課題としてあげられ、ファンドの実施時に改善が試みられた。

2.3 「世田谷まちづくりファンド」の理念(図1)

ファンドは、まちづくりセンターの支援も受けながら、行政、企業、住民の3者が主体的に参加、連携しながらすすめるまちづくりの中で、

- 1) 行政から独立し、運営・助成決定の面でもまた公益信託により基金自体の面でも中立性があること
 - 2) 住民主体の柔らかな発想のまちづくりを支え育てることを目的とし、単発的なイベントではなく、人材育成やネットワークづくりなど継続的な性格を持つまちづくりを対象とすること
 - 3) 日本版NPOを意図した専門家非営利組織「まちづくりハウス」を育成すること
 - 4) 助成グループが、まちづくりセンターの職員や発表会の場で運営委員等から財政面のみならず技術的な支援も得られること
 - 5) 「まちづくりファンド協力スタッフ」によって運営に関しても住民参加型で行うこと
- の5点を特色とする助成制度としてつくられた。また、

公平性や公益性をできる限り保つため、可能な限りガラス張りの運営で行われることになった。³⁾

2.4 「世田谷まちづくりファンド」の内容

ファンドは、学識経験者、住民、行政関係者等からなる運営委員会の公開審査により助成先が決定される。この時応募団体は、申請内容を模造紙1枚でプレゼンテーションを行う。また助成団体は年度末の報告書の提出に加え、中間発表会、最終発表会でもプレゼンテーション(模造紙と口頭での発表)を行わなければならない。第1回から第3回までは3部門制(各部門の概要は表2参照)で実施され、運営委員と参加者が一緒に試行錯誤しつつ助成事業が進められた。

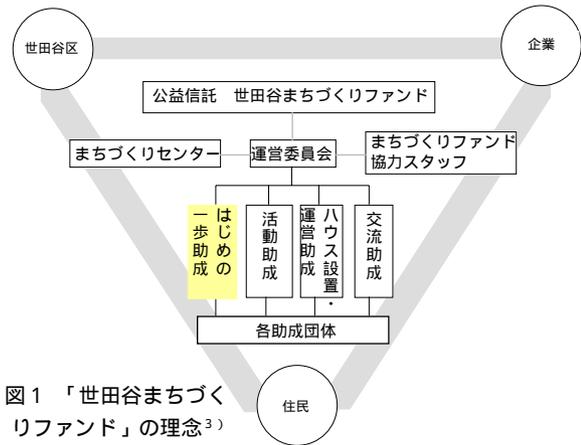


図1 「世田谷まちづくりファンド」の理念³⁾

表2 「世田谷まちづくりファンド」各部門の概要²⁾

	はじめの1歩部門	活動助成部門	ハウス設置運営助成部門	交流助成部門
活動の対象	・ 地域の住みよい環境づくりを目指す、自主的なまちづくり活動の第一歩を踏み出そうとしている、あるいは既に活動を始めているが活動の方針や企画がまだ模索状態にある活動 ・ 同一の活動について原則として1年限り ・ まちづくりに関わる専門家が中心となるグループは除く	・ 地域の住みよい環境づくりを目指す住民グループの様々な自主的なまちづくり活動に対して助成を行う ・ 新規に申請するグループへの助成を重視	・ まちづくりハウスの設置準備や運営を行う組織・個人に対して助成 <まちづくりハウス設置の目的例> ・ 活動拠点の確保 ・ 活動の本格的展開のためのネットワーク形成 ・ 公共的事業の準備作業を行うための人件費確保	・ 住民主体のまちづくり活動を行うグループ相互の情報交換やネットワーク形成の機会、場を設ける交流活動に対して助成
活動の例	・ 講師を招いてのまちづくりの勉強会 ・ 活動の方向や活動の内容を具体化するための勉強会 ・ 見学会など、活動をすすめるための予備調査や予備活動 ・ 組織づくりや、活動の輪を広げるためのイベント 等	・ まちづくりに関する基礎的な調査、勉強会、シンポジウム、ワークショップ等の活動 ・ 地域の環境を保全、改善するための具体的なまちづくり提案をつくる活動 ・ 住みよい環境をつくっていく活動	・ 住民の主体的なまちづくり活動に対する相談、情報提供、技術的支援 ・ 計画づくり、施設づくりへの住民参加のコーディネート ・ 住民主体のまちづくりを支援する専門家、企業、行政各課とのネットワークづくり 等	・ まちづくり活動分野のグループ同士の交流機会を設ける ・ 活動グループの交流機会を設ける ・ 地域内あるいは地域間の活動グループの交流機会を設ける
助成内容	・ 活動を行うのに必要な実費 ・ 活動に必要な講師や専門家の援助に対する謝礼 等	・ 活動を行うのに必要な実費 ・ 活動に必要な講師や専門家の援助に対する謝礼 等	・ 活動を行うのに必要な実費 ・ 継続的な活動を続けるために必要な組織の維持・運営費用の補助 ・ 専任スタッフの人件費補助	・ 定期的会合を開催するための費用 ・ 交流活動のPRとネットワークを広げるための費用 ・ 情報交換のための勉強会、ワークショップ等の開催費用 等
助成額	一律5万円	1件あたり5~50万円	1件あたり100万円を上限	1件あたり100万円を上限

表3 ファンド応募団体数、助成団体数、助成総額の変遷²⁾

	コンペ (92年)	第1回 (93年度)	第2回 (94年度)	第3回 (95年度)	第4回 (96年度)	第5回 (97年度)	第6回 (98年度)	第7回 (99年度)
応募団体数	35	25	19	18	26	37	39	32
助成団体数	13	15	13	14	21	27	30	29
助成総額(万円)	410	249	500	500	480	480	500	500

3. はじめの1歩部門創設とその後の変化

3.1 はじめの1歩部門創設の経緯

1992年より実施されたファンドであったが、第1回～第3回の間、応募件数が減少する傾向が見られた(表3)。その原因としては、1)申請用紙の記入、公開審査への参加、報告書の提出等が応募者側にとって負担が大きすぎることで、2)PR活動が不足しており、住民に知られていないこと、3)一定の人たちが対象となっている印象をもたれがちで初めての人には敷居が高いこと、4)まちづくりの定義が曖昧で自分たちの活動が対象になるのか判断がつきにくいこと等があった。これらをふまえ、簡便な形で参加できる初心者部門向けとして一律5万円の助成で書類審査のみで助成先が決められ、助成団体は審査会及び2回の発表会には出席するだけでよい「はじめの1歩部門」(概要は表2参照)が創設された。

3.2 はじめの1歩創設後の変化

1) 応募・助成団体数の増加と分布エリアの広がり

はじめの1歩部門が創設された第4回(1996)には応募団体の総数が26グループとなり、応募団体数、助成団体数ともに増加し(表3)、助成対象となった団体のエリア分布も広がった(図2)。世田谷区62地域中、ファンドの活動団体が分布しているのが42地域あり、うち13地域がはじめの1歩を受けたことのある分布エリアとなっている。

2) 助成団体の傾向

第7回(1999年度)までにはじめの1歩部門で28の団体が助成を受けたが、最初の2回(第4回、第5回)は次年度以降も継続して助成を受けたグループがほとんどなのに対し、第6回、第7回は継続して助成を受けたグループが半分以下になっている(表4)。はじめの1歩を受けた年度の活動を見ると、勉強会、調査等メンバー内



図2 助成団体分布エリア
(代表者の連絡先による)²⁾

表4 「はじめの1歩」部門応募・助成・継続助成団体数²⁾

	第4回 (96年度)	第5回 (97年度)	第6回 (98年度)	第7回 (99年度)	計
応募団体数	5	15	17	7	44
助成団体数	5	7	9	7	28
継続助成団体数	4	5	4	3	16

での活動に留まっている団体で、次年度以降に継続助成を受けた団体はなく(表5 斜字体の団体)初めてまちづくり活動を行っていく上でも何らかの形で対外的に関わりが持つことが活動の継続性と言う意味では重要であることが推察される。

表5 「はじめの1歩」部門助成団体、助成年度、助成額、活動概要一覧²⁾

No.	団体名	第4回 (1996)	第5回 (1997)	第6回 (1998)	第7回 (1999)	第8回 (2000)	「はじめの1歩」助成を受けた時の活動概要
1	愉快的住まいの会		12				コーポラティブ住宅予定地での花育てと周知板設置
2	みずの会						野川沿いでのフィールドワーク
3	グループ・カサブランカ		8	7			高齢者集会所花壇での花作りと園芸を通した児童館の子どものとの交流
4	風の仲間のコンサート実行委員会		10				福祉作業ホームでの地域住民向けのコンサートの実施
5	せたがや界隈研究会		10				世田谷区のお祭り等の調査と会のホームページ作り
6	瀬田フォーラムの会			14	34		街並みを守るための勉強会、遊歩道整備に関するマンション業者との交渉
7	せたがやサポートクラブ			12			行政・議員との交渉、講演会の実施、参考事例のヒアリング
8	鳥山「心をつなぐ」音楽会			24	21		老人ホームでのミニコンサート、鳥山「心をつなぐ」音楽会の開催
9	グループ楽々						高齢者のサロンづくりのための調査、勉強会
10	水と緑のみち						河川を起源とする緑道の調査
11	鳥山「生きる場作り」を考える会			25	29	26	障害者と健常者が共生できるビル建設のための話し合い、イベント開催
12	深沢三丁目街づくり環境を守る会 (東深沢まちづくりの会)			14	13	8	専門家を交えた相談・勉強会、行政への働きかけ
13	川の未来探検隊						川や緑道沿いを通る散歩道の提案
14	あけび会						特別養護老人ホームでの花づくり
15	多摩川・リバーシップの会				13	18	川の清掃、川下り、関連イベントのサポート
16	大原福祉作業所						区有地での知的障害者による花作りと花の頒布会等を通した地域との交流
17	演劇文化促進の会						演劇鑑賞の促進のためのサポート、宣伝活動
18	鳥山児童館の移転問題を考える会						鳥山児童館の中学校へ移設への対策、ニュース発行、働きかけ
19	土とどりを守る会				17		苗の頒布会、掲示板の設置、チラシの全戸配布
20	芦花公園花の丘の会				16	20	花の丘での花植えと除草、花見イベントの実施
21	囲むすび 98				11		公園に関する利用者調査とそれに基づく公園マップづくり
22	おはなしランド					13	紙芝居、影絵、指あそび用の軍手の制作、練習、おはなし会の実施
23	ふたこくらぶ						ニュースレターの発行、二子玉川の情報についての小冊子の発行
24	ぐるうぶMs.						谷戸川周辺でのフィールドワークと整備計画の提案
25	成城ボランティア部						障害者の視点からの街体験
26	世田谷親子体操連盟						体操まつりの準備・PRと実施
27	砧南プレーパークをつくる会					26	1日プレーパークの実施、他団体の遊びイベントへの参加
28	世田谷子育てマップの会						幼稚園、デパート等の施設のトイレ、公園についての調査と情報冊子づくり
	計	5	7	9	7		

* 網掛けの団体は次年度以降継続助成を受けなかった団体

4. 次年度以降継続して助成を受けたグループの活動実態

4.1 ヒアリング調査結果

0) ヒアリング調査について

ヒアリング調査では、はじめの1歩部門の助成を受け、次年度以降も継続助成を受けた団体(16グループ、表5参照)に対し、1.メンバーの人数、活動経費、活動拠点などの活動環境、2.活動目的、きっかけ、対象地域など活動自体について、3.ファンドへの応募動機やまちづくりセンターとの関わり、支援機構等について、事前に団体の代表者等に質問票を送り、対面調査を行った。

1) 活動実績の有無

表6は、対象団体がファンド申請以前に活動実績があったかどうかにより、活動着手型：ファンドの助成と同時期に活動が始まったもの、あるいは、ファンドの助成をきっかけに活動に着手したものの

ステップアップ型：ファンドの助成とは無関係に活動が始められ、その過程の中でファンドの助成を受けたものの2つに分類し、活動実績のあるステップアップ型の団体に関してその実績を整理したものである。16グループのうち、9グループが助成をきっかけとしてまちづくり活動を始めたことが分かる。また、7つのステップアップ型グループのうち、3つがグループとして10年以上の活動実績がある。

2) 活動実績と活動経費

活動実績の有無と活動経費の関係を整理すると、既に活動実績を持っているステップアップ型の活動団体のほとんどは、はじめの1歩の助成以外にも財源を得て、5万円以上の活動経費で活動している。ファンドの助成以外の財源(表7)としては、5万円以上で活動している全9グループのうち、メンバーからの年会費から得ているところが4つと最も多い。次に多いのが寄付で3グループ、(うち1グループはイベントの収益からも得ている)また、リーダー的な存在が1人で不足分(1~2万円)を補填している団体が2つあった。

3) 活動テーマと活動実績(図3)

地域に根付いた活動を主たるテーマとする団体は、活動実績のない団体が多く、文化関連の活動を行っている団体は、活動実績を持っている団体が多い。

4) 活動の具体性と活動実績・活動経費との関係

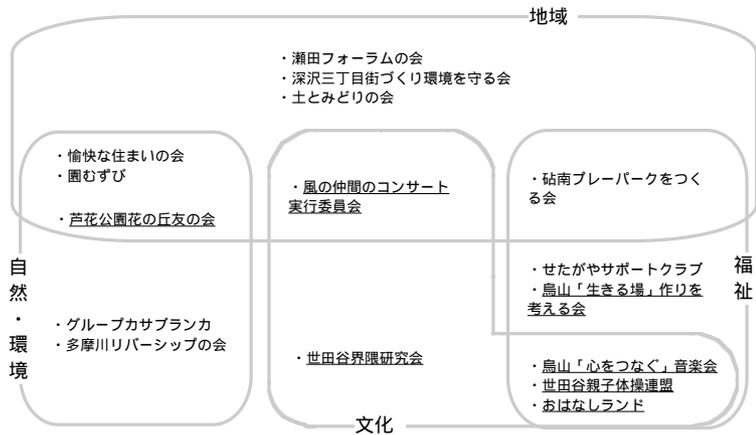
申請時に活動内容が具体的であったか、それとも目的のみが明確で試行錯誤しながら活動していったかにより、目的型：目的は明確だが、活動内容は模索しながら活動した団体
活動型：活動内容が具体的に決まっいて、それを実行した団体に分類し、さらにこれに活動実績と活動経費に関しての

表6 ステップアップ型団体の活動開始時期と活動概要

団体名	活動開始時期と活動概要
風の仲間のコンサート実行委員会(96)	92年~、施設のイベント時(年2回)に音楽会
世田谷界限研究会(96)	89年~、月1回の例会や町歩き
烏山「心をつなぐ」音楽会(97)	96.6~、月1回特養ホームへの訪問
烏山「生きる場作り」を考える会(97)	94年~、話し合い、バザー・イベント等への参加
芦花公園花の丘友の会(98)	96年~、友の会を結成、草むしりなど
おはなしランド(99)	89年~、「おはなしランド」の名前で月1回おはなし会
世田谷親子体操連盟(99)	約20年前より活動

表7 助成金以外の財源

団体名	財源
活動着手型 多摩川・リバーシップの会(98)	1000円の年会費×30人(発足時)
土とみどりを守る会(98)	寄付(5万円)
砧南プレーパークをつくる会(99)	代表者が負担(2万円)
ステップアップ型 風の仲間のコンサート実行委員会(96)	事務局担当者が負担(お茶・お菓子代程度)
世田谷界限研究会(96)	3000円の年会費×約30人
烏山「心をつなぐ」音楽会(97)	地域の商店街スタンプと寄付金(合計8~9万円)
芦花公園花の丘友の会(98)	イベント収益、イベント会費、寄付金(合計28万円)
おはなしランド(99)	会費+メンバーで負担(合計1万2千円)
世田谷親子体操連盟(99)	会費(合計5万円)



地域：特定の地域のコミュニティづくりを主な目的とする活動、自然・環境：川、草花に親しむことを主な目的とするもの、福祉：子育て、子育て環境、高齢者・障害者の環境、子供の遊び環境をよくすることを主な目的とする活動、文化：まち歩き、音楽等を一緒に楽しむことで交流することを目的とする活動

図3 活動テーマと活動実績

表8 活動内容の具体性と活動実績・活動経費

	活動実績 ¹	活動経費 ²	団体名
目的型	x		愉快的な住まいの会(96)
	x		瀨田フォーラム(97)
	x		せたがやサポートクラブ(97)
			烏山「生きる場作り」を考える会(97)
	x		深沢三丁目街づくり環境を守る会(97)
	x		土とみどりを守る会(98)
	x		園むすび(98)
活動型	x		グループ・カサブランカ(96)
			風の仲間のコンサート(96)
			せたがや界限研究会(96)
			烏山「心をつなぐ」音楽会(97)
	x		多摩川・リバーシップの会(98)
			芦花公園花の丘友の会(98)
			おはなしランド(99)
			世田谷親子体操連盟(99)
	x		砧南プレーパークをつくる会(99)

* 1 : ステップアップ型、x : 活動着手型
* 2 : 5万円以上

分類を加えたものが、表8である。目的型のグループは、1団体以外は全てファンドの助成をきっかけに活動を始めた団体で、活動経費もほとんどの団体が助成された5万円だけで活動している。初めてまちづくり活動をやり始めたグループにとっては、具体的な活動内容が見えづらく、助成された5万円で試行錯誤しながら活動した様子が読みとれる。一方、ファンドの助成とは無関係に活動を始めたステップアップ型の団体はほとんど活動型に分類され、ファンド以外の財源を得て活動していることが分かる。

5) メンバー構成と活動メンバーの増減

メンバーの構成としては、メンバーの中に階層関係が見られるものが10グループあり、うち、1人の強力なリーダーの下に他のメンバーが活動するのが4グループ、数人のコアメンバーが主導的に動くものが6グループあった。メンバー全員参加で話し合いながら活動した団体は6グループであった。これと2年前に実施されたファンドの評価調査(以下「調査」)⁴⁾では最初の1歩部門以外の部門の団体のデータと比較すると階層関係のある団体が44グループ中38グループ(うち1人の強力なリーダーの下に活動している団体が12グループ)、メンバー全員参加型団体は6グループとなっており、最初の1歩を受けた団体は、全員参加型メンバー構成の団体の割合が、他部門より多くなっていると言える。(表9)

また、最初の1歩部門での助成を受けていた年に活動メンバーが増加した団体は7グループある。その内訳をみると、全員参加型の団体が3グループ、コアメンバーが増加した団体が2グループ、コアメンバーでないメンバーが増加した団体が2グループであることが分かり(表10)、グループの課題としてコアメンバーの増加を挙げている団体がいくつかあったが、その難しさが読みとれる。

6) コアメンバーのつながり(表11)

「調査」では、コアメンバーの接点が生まれた根拠を地域に立脚するものと課題に立脚するものに分類しており、地域立脚タイプが44グループ中22グループ、課題立脚タイプが22グループであった。同様の分類を行うとはじめの1歩助成団体は地域立脚タイプが9グループと課題立脚タイプが7グループに分けられる。また課題立脚タイプの課題毎の団体数は、「調査」では建築・都市系、自然・環境系、福祉・医療系がほぼ同数(6、7グループ)で、文化・創造系がその半数(3グループ)となっているが、はじめの1歩助成団体でも同様の傾向が見られる。

4.2 典型事例(表12、図4)

1) 瀬田フォーラムの会

瀬田フォーラムの会は、目的型かつ活動着手型の団体である。マンション建設による樹木伐採反対運動を展開するうちにまちづくりセンターやファンド経験者ともつながりができ、運動を通して出来た地域での人間関係を生かしながら地域に根付いた活動を行っている。ただ、活動経費はバザーからも資

表9 メンバーの構成と活動メンバーの増減

	他部門	はじめの1歩部門
階層関係あり	38	10
1人の強力なリーダーの下に活動	13	4
数人のコアメンバーが主導的に活動	25	6
メンバー全員で話し合い、分担して活動	6	6
計	44	16

表10 メンバーの増加

メンバー増加	7
コアメンバーが増加	2
コアメンバー以外のメンバーが増加	2
全員参加型団体のメンバー増加	3
変化なし	9

表11 コアメンバーのつながり^{注1)}
地域立脚タイプ 課題立脚タイプ

年	地域立脚タイプ
玉堤 96	風の神楽のコンサート実行委員会
瀬田 97	瀬田フォーラムの会
鳥山 97	鳥山「心をつなぐ」懇談会
97	鳥山「生きる喜び」を考える会
深沢 97	深沢三丁目街づくり職を守る会
奥沢 98	土みどりを守る会
裕谷 98	芦花公園の友の会
上用賀 99	おはなしランド
鎌田 99	祐南プレーパークをづくり会

年	課題立脚タイプ
96	愉快なまいの会
98	團むすび
96	グループ・ガガソウカ
98	多摩川・リバーシップの会
97	せたがやサポートクラブ
98	世田谷親子体操連盟
96	せたがや界隈研究会

表12 典型2団体の概要

	瀬田フォーラムの会(97)	おはなしランド(99)
活動目的	瀬田でのまちづくり勉強会とコミュニティ形成	ゆとりを持った子供に育てるため幼児期に素晴らしい話をたくさん聞かせること
ファンドを知った媒体	まちづくりセンターについてのパンフレット	児童館職員
メンバー構成	<コアメンバー> 30代 女性1(主婦) 40代 女性2(主婦) 60代 男性1(都市計画系の事務所代表) <その他のメンバー> 20代 女性1 30代 女性1 40代 女性2 50代 女性1 計 9	30代 女性4(うち主婦3) 40代 女性5(うち主婦2) 計 9
メンバーの集まったきっかけ	近隣	幼児サークル
メンバーの増減	なし	3人増加
活動拠点	代表者の家	上用賀児童館の図書室
活動のすすめ方	代表者を中心に4人をコアメンバーとして活動	メンバー全員で分担して
支援機構	Uさん(マンション反対運動経験者、ファンド経験者) まちづくりセンタースタッフ	特になし
行政との関わり	特になし	上用賀児童館より会議室の提供、アドバイス
活動対象地域	瀬田1、2丁目	用賀、玉川台
主たる経費	人件費(講師謝礼)	紙芝居 影絵(OHP)等の材料費、制作費
はじめの1歩を受けた翌年度の活動概要	(継続)勉強会/ニュースレターの発行/他グループとの交流/(新規)オリジナル絵はがき作り、地域マップづくり	現在進行中

金を得ており、5万円以上である。

2) おはなしランド

おはなしランドは、活動型かつステップアップ型の団体である。ファンドの助成前に約10年間の活動実績を持っているが、助成により、作品数が増えると共にファ

ンド助成団体として知名度が上がり、活動エリアが用賀周辺だけだったのが隣接地域まで広がった。

5. まとめ

以上のまとめとして次のことが分かった。

- 1.はじめの1歩はその意図通り、申請者にとって他部門より負担が少なく、気軽に応募できる部門として役割を果たしている。
- 2.「はじめの1歩」部門の助成を受けた団体には、助成をきっかけにまちづくり活動に着手した団体と、ある程度の実績を持ちつつも、さらなる発展のため助成を受けたグループがある。
- 3.その中で行われている活動、団体のメンバー構成、活動のやり方などは、他の部門と比較しても大きく違いはない。

おわりに

今後の課題として、はじめの1歩部門の助成を受けたが次年度以降継続して助成をうけなかった団体について、団体の存続、助成を受けなかった理由などについて追跡調査を行っていく必要がある。

<補注>

- 1.「世田谷まちづくりファンドによる住民活動支援の評価調査」⁹⁾では、課題立脚タイプの内訳を次のように定義している。建

築・都市系：建築の専門家が参加型建築や住民活動支援を目的として生み出されていったもの。職能的に近いこともあり、グループがまちづくりセンターとの関わりを持っていることが共通点。自然・環境系：自然保護活動を前提とするものが主流だが、環境保全としてリサイクルに取り組むグループ、草花を育てるグループで地域的求心力を持たないもの、小動物の生活環境からまちづくりを考えるものも含む。福祉・医療系：障害者運動を背景に持つもの、地域でのリハビリを考える医療・福祉の専門家、カウンセリング、子育て支援システムのグループ。文化・創造系：大工の木工教室、祭り企画、商店街の情報誌、青少年育成や文化振興の全国的組織など。

<参考文献>

- 1)世田谷まちづくりセンター(1999)「市民まちづくりフィールドマップ」
- 2)第4回(1996年度)～第7回(1999年度)「『公益信託 世田谷まちづくりファンド』助成事業応募者一覧及び活動企画内容」、『同』中間発表会資料、『同』最終発表会資料
- 3)卯月盛夫他(1994)「公益信託『世田谷まちづくりファンド』をベースにしたまちづくりの仕組み - その構想、実際と課題 - 」(まちづくり公益信託研究室(1994)「まちづくり公益信託研究」)
- 4)世田谷まちづくりセンター(1996)「世田谷まちづくりファンドの今後のあり方についての提言」
- 5)世田谷まちづくりセンター(1999)「世田谷まちづくりファンドによる住民活動支援の評価調査」

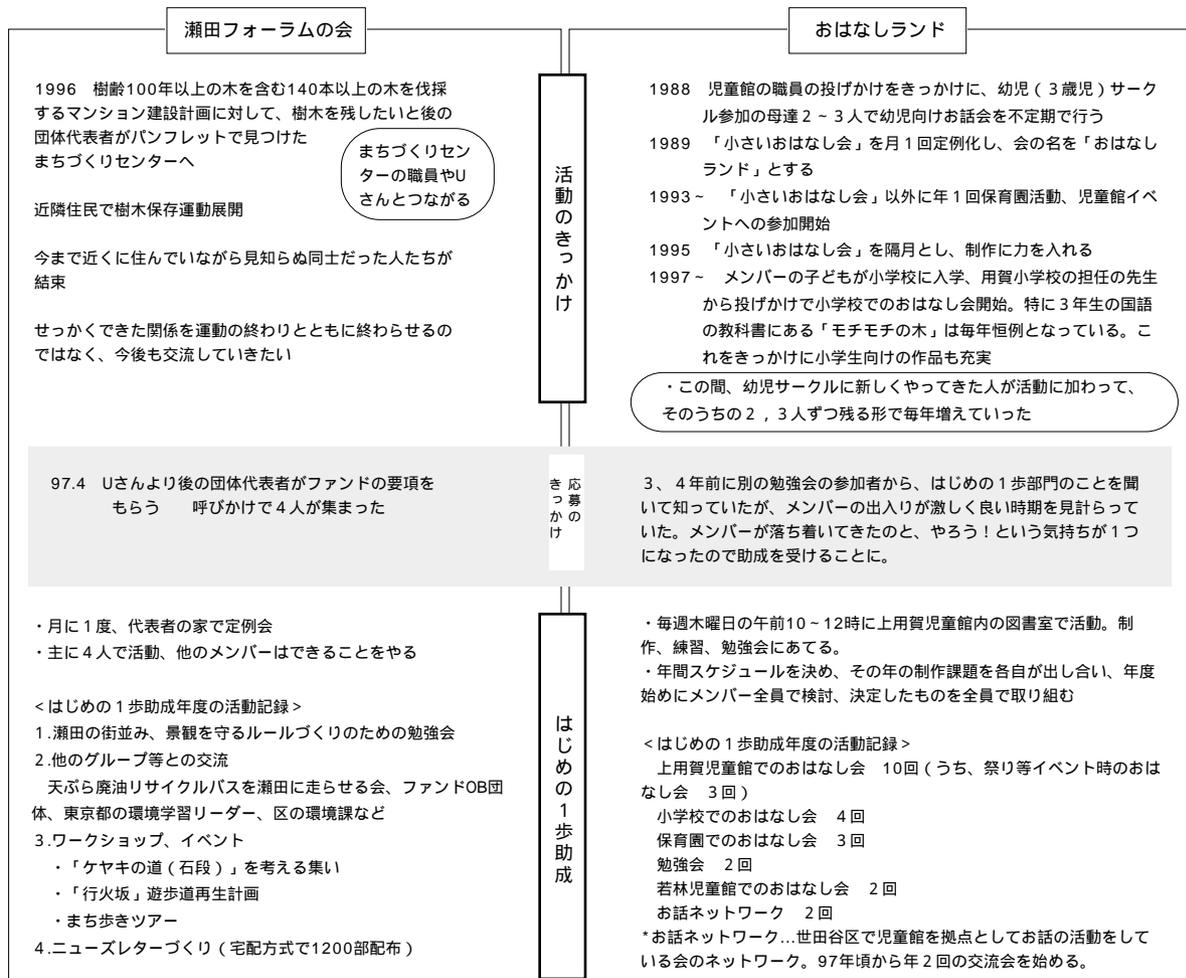


図4 典型2団体の「はじめの1歩」部門助成による活動に至る流れ